埼玉大学紀要　教育学部，60(1)：163－176（2011）

近世後期上方における音変化の諸相

村上　謙　　埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード：後期上方語、交替、脱落、添加、融合

1. はじめに

近世語研究において、前期は上方語、後期は江戸語を中心とし、その地理的な懸隔を捨象した上で両者を連結させるという研究手法が長らく行われてきた。こうした方法がとられ続けた学史的背景には、標準語の「正統性」の問題が密接に関わっている。すなわち、標準語を東京語、江戸語とさかのぼらせ、資料的制約によってそれ以上遡上できなくなる 18 世紀中葉以前については（無理やり）上方語に接続することで「直系」としての出自を保証しようとする考え方があって、それによれば標準語の「歴史」に直接関与しない 18 世紀中葉以降の上方語は「傍系」あるいは「一地方の方言」として、近世語研究の主要な対象から外されることになったのである。こうした風潮は学の成立当初から存在したと見られるが、そうした政治的な一面がほとんど忘れ去られた今でもなお、後期上方語は近世語研究から疎外されたままであり、基礎研究も整備されていない状況にある。前期上方語における基礎研究としては湯沢幸吉郎著『徳川時代言語の研究』が不朽の名著として重んじられているが、後期上方語にはそのようなものがないのである。筆者はそうした欠落を埋めるべく後期上方語研究に従事してきたが、まだまだ扱えていない分野も多い。そこで本稿では、従来手薄の感が強かった当期の音変化について、主に洒落本と噺本、浄瑠璃から用例を収集して概観したい。

【本稿における分類法】

本稿では拍を中心に分類を行う。拍数が単純に増減するものをそれぞれ「添加」「脱落」（鉤括弧つき）とし、拍内での変化（頭子音や尾母音の交替といった変化）を「交替」とする（鉤括弧なしの、添加、脱落、交替、は拍数と関わらないレベルでの変化について述べたものである）。また、拍数の減少と拍内での変化の両者にわたるものを「融合」として分類する。挙例に際し、音変化の例示に支障のない範囲でルビや漢字表記などを改めた。なお、本稿で挙げる用例はいずれも音変化を伴うものであるが、音変化のみに起因する変化形であると述べるわけではない。

2.「交替」

2-1 母音の交替

(1) 逆行同化による母音の交替

助詞テが後続の母音音節（a、o）の影響を受けその尾母音が交替する場合がある。

《て＋ある→たある》

ゆすつたある（北華通情）
きまつたある（北華通情）
金はとんだ有（富んである、軽口筆彦咄）
毛が生（はへ）たある（しんぱん一口ばなし）
はいつたあるな（興斗月）

《て＋あげる→たあげる》

こふたあげとおくなはんか
（買ふてあげる、興斗月）
頼（たの）んだあげ升（ます）は（大寄噺の尻馬）

《て＋おくれる→とおくれる》

こふたあげとおくなはんか（興斗月）
聞とおくれ（興斗月）
なはつとおくなはゐ（興斗月）
見せとおくれ（大寄噺の尻馬）
かしとおくれ（貸しておくれ、大寄噺の尻馬）

是切でよんどおくれなさらんじやあろふナ
（粋の曙）

《て＋お居る[1] →とおいる》

わろとおいた（笑ふてお居た、興斗月）

こうした所謂逆行同化の例は現在でも用いられるものであるが、その出現は寛政（1789-1801）に入ってからで、近世前期からは報告がないようである[2]。なお、現在の近畿地方では後続音節が母音音節でない場合の逆行同化、例えば「言うたはる」（言うて＋助動詞ハル）の様な言い方があるが、後期上方語では見られない。また、後期ではこれらが更に「ゆすつたる」「たのんだげる」「よんどくれ」等の様になることはないようである。また『興斗月』には、「ちとおぼゑてとおくなはい」という例が見える。これは「おぼゑて」＋「ゐて」＋「おくなはい」→「おぼゑてて」＋「おくなはい」→「おぼゑてておくなはい」→「おぼゑてとおくなはい」（逆行同化）となったものである[3]。助詞デの場合も若干見えるが江戸訛として使われたものであって上方語とは考え難い。

班猫（はんめう）の骨切（ほねきり）だあろ　（阿蘭陀鏡）

おこつたけんくわだないか　（戯忠臣蔵噺）

(2) ハ行四段動詞終止連体形の変化形

語幹末尾母音に-a を持つハ四（ex. 歌ふ）の場合、中世末のオ段長音の開合の混乱に伴って終止連体形に-ou（-o:）型の変化形（ウトウ（ウトー））が生じていた。そうした形は後期にも見える。

《-ou 型》

鬼がわろふ（笑ふ、穿当珍話）

おぎのふ（補ふ、遊廓年々考）

こへをそろへてうとふ（歌ふ、十界和尚話）

丸めてしもふ（しまふ、画ばなし当時梅）

もろふやうな事（貰ふ、夕涼新話集）

のたもふ（のたまふ、軽口四方の春）

これらは明治以降も用いられており、B.H.Chamberlain の『A Handbook of Colloquial Japanese』（初版）に西日本に特徴的な言葉づかいとして記述があったり[4]、『口語法調査報告書』第 1 条にも京都や大阪の一部、兵庫県等で報告されている。また、『臍が茶』には-ou 型の動詞「もろふ」（貰う）に助動詞ウがついて短呼されたと思われる例が見えている。

まだ焼（やか）ずば、随分短（ずいぶんみじ）かいのを、はやう焼てもろをぞや

ハ四以外の-au→-ou の変化形としては、『軽口四方の春』に「あとふる」（与ふる）が見えた。

(3) 形容詞シク活用ウ音便短呼形の変化形

後期には形容詞シク活用ウ音便に様々な変化形が存在したことが知られている。次に挙げる語形（シ形）は「はづかしゆござる」（長町女腹切）や「むつかしゆ成た」（山崎与次兵衛寿の門松）のような短呼形（シュ形）から変化したものと考えられ、古くは『玉塵』や『毛詩抄』等からも報告がある（森田武（1977）等）。

《シ形》

おいそがしござりますか（列仙伝）

おやかましござんしよ（遊客年々考）

宜しおます（客野穴）

淋しなれば（客野穴）

おかしないワイ（客野穴）

ちなみに短呼形（シュ形）そのものは後期には見えない。なお、ク活用の語「大きい」でも類似の変化が見えるが（キュー→キュ→キ）、用例はほとんど見当たらない。

皆がしやりんで大キやかましふ云たものじや
（なにはの芦）

(4) 形容詞シク活用ウ音便の変化形

さらにシク活用の語では寛政頃から「やかましい言ふ」のような語幹末尾母音をのばす言い方（シー形）が出現する（村上謙（2002b））。テ形の場合にもこうした言い方（シーテ形）が見える。

《シー形》

あのやかましい云女中（いふぢよちう）（粋学問）

いそがしい暮（くら）して居（ゐ）ました（春興噺万歳）

あれがおかしいするのはおれをきろふてか
（落噺千里藪）

《シーテ形》
おかしひてならぬ（言葉の玉）
こつちがはづかしいてあいさつの仕やうがない（庚申講）
わたしやくやしいて／＼ならぬわいなア（粋の曙）
何ほどうつくしいても紙に書る（大寄噺の尻馬）
あんまりあほらしいて礼も言りやせんでエ（穴さがし心のうちそと）

現在ではこうした言い方が大勢を占め、本来のウ音便形は殆ど用いられない。また、ク活用の語でも「大けい」の場合『開学小筌』（宝暦（1751-64）頃）に、「目は大けいて はなは申ニ及はす大なり」という例が、また「かわいい」の場合で『極彩色娘扇』（1760）に、「男じや物かはいひなふて。」という例が見えているが、用例は少ない。

(5)その他の母音の交替①　―単母音の場合―

《-a→-i》
あいまち（過ち、丹波通辞）

《-a→-u》
いひなすつた（なさつた、老楼志）
御出なすつた（短華藥葉）

《-a→-e》
ナンテラ（たら、今今八卦）

《-a→-o》
そゝこしい（そそかしい、来芝一代記）
やはらこい（やわらかい、粋学問）
やらこき衣服（やらかい、水の行すえ）

《-i→-e》[5]
おふけな（大きな、粋のすじ書）
でけて（出来て、色深狭睡夢）
しゞめ（蜆、春興噺万歳）

《-u→-a》
くちひら（唇、意気客初心）

《-u→-i》[6]
さげしまず（蔑む、今今八卦）
いごく（動く、竊潜妻）
おいるし（お許し、老楼志）
長ぢばん（襦袢、落噺千里藪）
さんごうじ（珊瑚樹、落噺千里藪）

《-u→-o》
かたくろしい（堅苦し、聖遊廓）
おもくろしうて（重苦し、南遊記）
おとましうて（疎ましうて、夢中生楽）
たのき（狸、戯言浮瓢箪）
いのころ（犬ころ、戯言浮瓢箪）
おのし（おぬし、風俗三石士）
こそぐる（くすぐる、陽台遺編）

《-e→-i》
おばき（お化け、箱まくら）
これい／＼[7]（へ（助詞）、聖遊廓）

《-o→-a》
そゝなかされて（そそのかされて、滑稽即興噺）

《-o→-i》
あしこ[8]（あそこ、南遊記）

《-o→-u》
遊（客野穴）

-a、-u から他の母音に交替した例は数多く見えるが、-i、-e から交替することは少ないようである。また、それぞれの交替のあり方にも特徴が見られる。-a は他の 4 母音全てに交替できるのに対し、後舌母音-u、-o は前舌母音-e とは交替せず、前舌母音-i、-e は後舌母音とは交替しない。

(6)その他の母音の交替②　―連母音の場合―

《-ai→-ae》
くわへ（慈姑、春興噺万歳）
居前（居住まひ、徒然粋か川）
きらゑか（嫌い、興斗月）
出しますさかへ（さかい、色深狭睡夢）
してじやさかゑナア（さかい、春興噺万歳）

《-au→-ou（→-o:）》
危く（客野穴）

《-ae→-ai》
気まい[9]（気前、粋もどき）
自まひをはたらく（自前、夢中生楽）
おまいさん（うかれ草紙）
当前（客野穴）
かいる（蛙、夢中生楽）

蠅（竊潜妻）
立帰る（客野穴）
かいせ（返せ、風俗三石士）
《-ae→-ei（→-e:）[10]》
そうけい（かえ（終助詞けいの成立）、浪花聞書[11]）
《-ei→-ee（→-e:）》
お見せゑな（見せ＋いな、興斗月）
何でゑな（何で＋いな、興斗月）
来てゑゝな（来て＋いな、興斗月）
《-oi→-ai》
おさい（遅い、粋のすじ書）

2-2 撥音化
《-a→N》
あんた（あなた、一文塊）
《-i→N》
たのんますぞ（頼みます、浪花色八卦）
こまんなさる（困りなさる、落噺千里藪）
だんない（だいじ（大事）ない、陽台遺編）
にんやかな所（賑やか、雅興春の行衛）
ねこにかんぶくろ（紙袋、粋行弁）
《-u→N》
つぎやんな（やるな、郭中奇譚(異本)）
かまわしやんな（しゃるな、夢中生楽）
かまいくさんな（くさるな、陽台遺編）
いんのこ（犬の子、臍が茶）
ちよつとよびなんせんか
（打消ヌの撥音化、月花余情）
《-e→N》
そんなら（それなら、浪花色八卦）
そんなりや（郭中奇譚(異本)）
おくんなされ（おくれなされ、北川蜆殻）
そんじや（それ、うかれ草紙）
そんじやてゝ（嘘之川）
こんだけ（これ、興斗月）
けんど（けれど、皇都午睡）
《-o→N》
あんなりで（あのなりで、北華通情）
もん（物、月花余情）
せんだくもん（洗濯物、鳩灌雑話）
～ドン（殿、一文塊）
あげたんじやいナ（の（助詞）、色深狭睡夢）
好なんとはちがひます（の、色深狭睡夢）

この他、長音が撥音化されることがある。江戸中期以降の成立と考えられる方言書『丹波通辞』の「はねまじきをはぬる」という部立には、正月、鶺鴒、名人、名誉などの長音部分をそれぞれ、「しよんがち」、「せきれん」、「めんじん」、「めんよ」、といった具合に撥音にする例を挙げている。洒落本でも「インエ」（いいえ、箱まくら）、「胴腹」（南遊記）とする例などが見える。

逆に、撥音が変化する場合もある。『丹波通辞』の「はねへきをはねざる」という項目には撥音を「い」、「う」とした例が多く挙がっている。主にｓ、ʃ、dʒに先行する場合「い」となり、語末にくる場合は「う」となるようである。以下、『丹波通辞』から。

《N→i》
たいじやく（短冊）
さいしよ（山椒）
ばうまい（飽満）
へいじ（返事）
だいせん（団扇）
さいせん（散銭）
たいしやうにち（誕生日）
《N→u》
まんへう（満偏）
てんかう（癲癇）
けんどう（慳貪）

こうした例は洒落本、噺本などではあまり多くなく、「てつぺい」（てっぺん、色八卦、南遊記）が見える程度である。また、次の例のように、撥音が期待されるところで促音が表れた例がある。

狂言はやつわりとして少し小むつかしい所で　（やんわり、列仙伝）

現代の標準語では促音は無声子音の前に限り出現するが、上方においてはそうとは限らず、例えば現在でも柔らかな服地や人のさっぱりとした容姿に対して「さっわり」を使う。

2-3 促音化

《ku→Q》

わたツしも見に参りました

（わたくし、北華通情）

《ru→Q》

云なさつといな（なさるといな、廓中掃除）

《ri→Q》

どふなつと（なりと、郭中奇譚（異本））

ふろでなつとやめんかいナ（嘘之川）

《ta→Q》

こなつ様（こなた様、幼稚子敵討）

2-4 子音の交替①　—s（∫）・h 間での交替—

前節までは母音および特殊拍の変化について見てきたが、本節では子音の交替について見る。まず、s（∫）・h 間の交替から。この変化は上方の音変化の代表格とされるものであるが、実際は語彙的、個別的な要素が強い変化でもある。また、殆どが s（∫）→h 方向の変化であり、h→s（∫）の交替例は管見では「もしとり」（もう一人、興斗月）とあったのみである。以下、特徴的なものや注目すべき例をまとめる。

(1) ナサルの sh 交替とその関連語形

ナサルが sh 交替したものとしてナハルがある。

心へておくれなはれ　（陽台遺編）

おあがりなはれ　（月花余情）

ただし、こうした交替形は多くない。本格的に用いられるのは 19 世紀以降のようである。またこのナハルがさらに子音 h の脱落によってナアル（ナール）となる例、また、それを短呼したナルがある。

貰ナアレ　（客野穴）

おいでなあるエ　（客野穴）

何いひなるぞひナア　（粋の曙）

いなしてしまいなればよいがな　（北川蜆殻）

また、ナサレマスが様々な変化過程を経てナマスとなるが、その一過程と目されるナハマスが『開学小筌』に見えている。

よんでおやりなはませや

これは「なされます」→「なさます」or「なはれます」→「なはます」となったものであろうか。

(2) ～サンの sh 交替とその関連語形

接辞～サンおよびそれを構成要素とする代名詞は～ハンとなることが多い。

今ではこなはんと。私と旦那はんとばっかり。　（仮名手本忠臣蔵）

また、さらにそれが変化した～アンという接辞が見られる。これは s→h、更に子音脱落という過程を経たものと思われる。

おばゝあん　（泉台冶情）

仁三あん　サンをアンといふ　（粋のすじ書）

また、これと前接の前舌母音が連接し、わたり音が生じた～ヤンがある（姉（あね）やん（客野穴））。～ヤンは接辞として次第に独立し、その出現が前接音と関わらなくなる。

(3) シャルの∫h 交替によるハルとその関連語形

尊敬の助動詞シャルが∫h 交替を経てハルとなった例がある（村上謙（2004））。

《ハル》

そんなら早ういて戻（もど）らはれ

（容競出入湊（1748、浅田一鳥他）

コレかうじやはいの　聞カはれ（容競出入湊）

どふぞ見て貰（もら）はは れ　（容競出入湊）

供連レて死（しな）はれ

（性根競姉川頭巾（1774、近松半二他））

経帷子。取ツて来てくれいと云（いは）はつたぞや。

（性根競姉川頭巾）

このハルは今のところ浄瑠璃にのみ見られるものであり、管見が及んだ最古の例としては『忠臣金短冊』（1732）の「何成共とははれ」（問う＋ハル）であった。いずれの例も全て船頭や男伊達によって用いられている点、注目される。また、このハルがさらに変化したと思われるアルも見える。

ハレ　隠（かく）さあるないの　（容競出入湊）

行あれ　（極彩色娘扇）

また、ヤシャルが変化したものとして、ヤハルが見えている。

お頭内に居やはるか。

（繁花地男鑑（1779、春木元輔他））

この例はナサル→ナハル→ヤハルとなったものの可能性もあるが、この時期にはまだナハルがほとんど用いられないから、ヤシャルの変化形と考えた方が妥当であろう。また、サシャルの変化形と見られるサハル、サアルという語形もある。

アレ見さはれ　（容競出入湊）

こなはん きつう投(なげ)さあるげなの

（容競出入湊）

気づかひさあるな　（性根競姉川頭巾）

ちなみに現在の近畿地方で用いられる尊敬の助動詞ハルはナサルが音変化したものと言われ、使用開始時期は明治頃とされているが、こうした用例の存在を重視するなら、その成立に関する諸説を再検討せねばなるまい。

シャンスの場合でもʃh交替例は見える。

いはは**はんす**　（忠臣金短冊）

にらまはんすな　（鵙山姫捨松（1740））

(4)その他のsh交替例

《s→h》

紙燭(ひそく)（徒然粋か川）

叱(ひかつ)て（粋宇瑠璃）

ひつこひ（しつこい、うかれ草紙）

七年(ひちねん)（戯言浮瓢箪）

おまへん（おません、北川蜆殻）

質屋(ひちや)（客野穴）

～まひよ（ましょ、興斗月）

～まへん（ません、興斗月）

ヲゝひつれ（失礼、興斗月）

女房に下タはるか（下さる、繁花地男鑑）

「おまへん」などはほぼこの語形に限られ、「おまふ」などとなることはない。

2-5 子音の交替②　―その他の場合―

《d→r》

おめれとう御さります（おめでとう、粋行弁）

《d→z》

つれざつてきました（連立って、うかれ草紙）

《m→b》

しかつべらしく（しかつめらしい、色八卦）

ねぶる（眠る、阿蘭陀鏡）

せばい（狭い、身体山吹色）

男ざんばい（三昧、客野穴）

《b→m》

うかみ給ひ（浮び、原柳巷花語）

えらみ（選び、徒然粋か川）

錆(さみ)（さび、粋学問）

《z→d》

ついど買ふたことなく（ついぞ、戯言浮瓢箪）

そんな事はおませんでゑ

（終助詞ぜえ、客野穴）

《s→d》

ゆきなんで（なんせ、一文塊）

《n→d》

おどれ とは おのれといふこと

（己、新撰大阪詞大全）

おどれら（おのれら、落噺顋懸鎖）

《z→w》

酒でごわります（ございます、立春噺大集）

《z→h》

いたゞきとふごはアりまアする

（ございます[12]、色深狭睡夢）

《ʃ→s》

太夫主(たゆす)（主[13]、一文塊）

東やス（主、郭中奇譚(異本)）

《dʒ→z》

アゝづゝな（術無い、開学小筌）

気づゝなふもない（北川蜆殻）

《dʒ→j》

お待はんや（助動詞じゃ、興斗月）

そふやあろ（興斗月）

《dʒ→tʃ》

浅吉さんはわけしつてちや

（助動詞じゃ、興斗月）

どこぞゑいてちやつたか（じゃ[14]、興斗月）

《r→g》

ぎつはな男（立派、間似合早粋）

2-6 子音の脱落

《s》

仁三あん　さンをアンといふ（粋のすじ書）

あいな（さいな、竊潜妻）

くだアい（ください、麻疹噺）

《ʃ》

わたい（私、客野穴）

《n》

びん上とはあんしやへ（なんじや、嘘之川）

《j》

これあけあんせよ

（助動詞やんす[15]、郭中奇譚(異本)）

《z》

ごあらぬ（ござらぬ、鵙山姫捨松）

ちなみに、子音ｓの脱落と見なせるサ行四段動詞のイ音便はこの時期殆ど見られない。「さす」に残るのみである[16]。また、バ四ウ音便もこれと同様、殆ど用いられない。

そりやくめさいたぞ　（陽台遺編）

腋刀さいたもあり　（戯言浮瓢箪）

あちらをよふだりこちらを呼だりして

（呼ぶ、夢中生楽）

2-7 母音連接時のわたり音の添加

「～合ひ」、「～合ふ」などの場合にわたり音j、wの添加が見られる。

《-a＋a→-aja》

ばやい（場合、北華通情）

腹合（うかれ草紙）

《-i＋a→-ija》

はりやい（張り合ひ、陽台三略）

口合（間似合早粋）

にやわぬ（似合ふ、夢中生楽）

思案（粋包丁）

しやわせ（幸せ、色深狭睡夢）

取合（客野穴）

《-i＋a→-iwa》

じわい（地合、客野穴）

《-i＋o→-ijo》

いふてきよる（来をる、北華通情）

いひやうている（言ひ合ふて、北川蜆殻）

行合た（客野穴）

《-u＋a→-uwa》

去なれぐはひ（具合、老楼志）

《-e＋a→-eja》

中居となれやうて（馴れ合ふて、夢中生楽）

てやい（手合、北華通情）

《-e＋o→-ejo》

忘れよつたよ

（忘れをった、思増山海の習草紙）

3.「脱落」

「脱落」で目立つのは特殊拍の場合である。本節では、特殊拍の「脱落」を中心に見ていきたい。まず、長音の「脱落」即ち短呼から見る。

3-1 長音の「脱落」

(1)助動詞ウが下接した場合の短呼

『かたこと』には

湯を飲ふ 水をのまふ。･･･などいふべきを 湯のも 水のも･･･などゝ云ること葉。略なれば耳にもさのみたち侍らねども。このましからずや。

とあるが、こうした言い方は後期にも多く、枚挙にいとまがない。

のいてやろ　（やらう、陽台遺編）

よかろぞへ　（よからう、夢中生楽）

(2)ウ音便の短呼

前期にも見られるが、後期に入ってからの方が多く見えるようである。しかし助動詞ウの場合に比べると出現する割合は低い。

〇動詞ウ音便

《-u:→-u》

喰て（食うて、徒然粋か川）

くてくれ（粋のすじ書）

《-o:→-o》

してもろて（貰うて、色深狭睡夢）

くろたり（食らうて、色深狭睡夢）

そろへてしもたら（しまうたら、水の行すえ）

○形容詞（ク活用）ウ音便

《-u:→-u》

わるなるし（悪う、北川蜆殻）

厚なけりや（客野穴）

《-o:→-o》

ヨゴンス（良う、色八卦）

おもしろなひ（面白う、言葉の玉）

おそなつたら（遅う、粋の曙）

おかとおます（お堅う、興斗月）

なお、動詞ウ音便で短呼が生じるのは二拍語、三拍語動詞に限られるという特徴がある。形容詞の場合は拍数による制約はないが、下接語との共起制限があり、短呼時の下接語は「なる」、「ない」や補助動詞類に限られる傾向がある(村上謙（2003b))。

また、～トムナイという言い方があるが、これらは「たうもない」の長音部分の短呼を含む変化形である。

色のわるひは見とむない（郭中奇譚（異本））

聞とむない（徒然粋か川）

また「見とみない」(粋庖丁）のような～トミナイという形も見られる。またミトミナイは促音が添加されミットミナイともなる。『浪花聞書』には「見とふもないを見ツとみない 行ともないを行とみないといふ 江戸でいふともないなり」という記述がある。

またこれに類するものとして～ソムナイという言い方がある。

知そむないこと（徒然粋か川）

ありそむない（うかれ草紙）

これらは「さうもない」から変化したものである。また、この他「こんな肴はとむならん」(客野穴）があるが、「どうもならん」からの変化である。「もむない」(む（う）まうもない、粋学問）も同類である。

(3)形容詞終止連体形の短呼

形容詞のうち、語幹末尾母音が-i で終わるものについてはその終止連体形が短呼されることがある。

《-i:→-i》

かわいと思ひ付いて（かわいい、夢中生楽）

はだの美し女房（美しい、新製欣々雅話）

新し手拭（新しい、雅興春の行衛）

数のおふきものるれども（大きい、新撰勧進話）

(4)その他

《-i:→-i》

いやがる（言ひやがる、北川蜆殻）

おいる（御言ひる（＝「言ふ」の所謂「オ＋一段化」形)、興斗月）

おもいれ（思い入れ、老楼志）

《-u:→-u》

婦人（原柳巷花語）

大夫（阿蘭陀鏡）

このじゆ（此中、箱まくら）

白雨（夕立、軽口五色帋）

《(-ei→) -e:→-e》

せんべ（煎餅、遊客年々考）

芸子（阿蘭陀鏡）

助兵衛客（客野穴）

せのなひよふなかほ（精、水の行すえ）

余計（粋学問）

さよけ（けい（終助詞)、粋の曙）

《-o:→-o》

さゝの葉のよな（様、聖遊廓）

さよ（左様、北華通情）

うつとしい（鬱陶しい、郭中奇譚（異本））

そしたら（さう、陽台遺編）

とがらし（唐辛子、遊客年々考）

浄留理（徒然粋か川）

掛香（徒然粋か川）

柳ごり（行李、徒然粋か川）

どもなりません（どう、色深狭睡夢）

最一編（もう、老楼志）

面倒かしい（老楼志）

かいしよ（甲斐性、風俗三石士）

どし（同士、箱まくら）

吉こ（吉公（人名)、色深狭睡夢）

居候（粋宇瑠璃）

てんごかき(転合、粋宇瑠璃）

しわんぼ（坊、遊廓擲銭考）

どろぼ（泥棒、阿蘭陀鏡）

びんぼ（貧乏、阿蘭陀鏡）

-a:を短呼する例は見えない。また、量的には-o:を短呼することが多い。

3-2 撥音の「脱落」

《N》

精進（陽台三略）
なんば煮（南蛮、浪花今八卦）
なんばうどん（今今八卦）
行燈（徒然粋か川）
旦那　だなといふやうにいふ（粋のすじ書）
昆布（粋学問）
めんめ（面々、南遊記）
まんべ（まんべん、風俗三石士）

3-3 促音の「脱落」

《Q》

いていふてこふ（行って、郭中奇譚（異本））
さきへいたといふてくれ
（行った、郭中奇譚（異本））
ねちてこまそ（捻って、郭中奇譚（異本））
とてきませうか（取って、新製欣々雅話）
おこしなはた（なはった、粋学問）
どのやうな人がもて来たへ（持って、粋学問）

上記の例はすべて促音便が脱落したものであるが、現在もこの様な用法が見られるからこれらを単なる促音無表記の例とは考え難い。この他の個別的、語彙的な促音の「脱落」例としては「べしてもなひ事」（別して、郭中奇譚（異本））等があるが、長音や撥音に比べてごくわずかである。

3-4 特殊拍以外での「脱落」

《i》

なつてる（～ている、粋の曙）
しつてる（粋の曙）
いふてる（色深狭睡夢）
まつてる（興斗月）
おきてゝか（おきていてか、興斗月）
おへさん（お家さん、軽口筆彦咄）

《e》

おまさん（お前さん、粋のすじ書）

《o》

おそふます（おます、興斗月）
来てゞます（興斗月）
さかいでます（興斗月）

《tsu》

あいら（あいつら、嘘之川）
こいら（こいつら、老楼志）[17]

《de》

花情さんのおいなはつたぞや
（おいでなはる、月花余情）
よふおいなん（おいでなんした、夢中生楽）
桔梗屋へおいなんして（陽台遺編）

《ra》

けふはいなんなん（ならん、千歳松の色）
をくなはんか（なはらんか、千歳松の色）

《ri》

安茶屋へはか行ぬ癖（ばかり、客野穴）
おしやましたが（おしゃります、夢中生楽）

《re》

なはつとおくなはゐ
（おくれなはい、千歳松の色）
見ゑますけど（けれど、客野穴）
けとよふ耳へ這入そいナア（なにはの芦）

《ro》

所（箱まくら）
粋のしあんどこ（所、遊里不調法記）

4.「添加」

「交替」「脱落」に比べて「添加」の例は限定的である。また、「脱落」の場合と同様、特殊拍の場合が殆どである。

4-1 一拍語の長音化

現在の近畿地方では一拍語における長音の「添加」、即ち一拍語の長音化がよく知られているところであるが、実際、洒落本や噺本を調べてみると名詞を長音化した例は僅かである。

せひひくし　（背、遊廓擲銭考）

ねいからないぞ　　（根から、短華藥葉）

などが見えたのみである。ただ、この時期を代表する方言書『浪花聞書』には「めい 目なり」や「ひイ　火也」のように一拍語の長音化例が数多く記載されているから、洒落本や噺本では規範的表記意識によって長音表記を避けた可能性がある。あるいは、『浪花聞書』の作者は「江戸者らしく少くも大坂の人ではない」(日本古典全集、東条操による解題）と言われており、その分ことばの違いに敏感であったのかもしれない。とすれば上方者にとって一拍語の長音化は気づきにくい方言であったとも考えられる。

また、動詞連用形＋ジャで尊敬を表す場合があるが、その動詞連用形が一拍の場合、二拍になった例が見える。

どふしてしつてゐゝじや（居る、うかれ草紙）

上なことしいじやわいなア

（する、軽口五色帋）

後期上方の動詞においては「一段化」なる形態変化が生じたことが知られるが、連用形一拍の一段動詞でも「一段化」形が見える（村上謙（2006））。

ゆかりの月(つき)の見立(みたて)があるが見いたか

（色深狭睡夢）

何で出ゐた　　（竊潜妻）

所謂連用形命令法や連用形禁止法でも二拍化したものが見える（村上謙（2003a,c））。

どふなとしい　　（する、十界和尚話）

わる事しいな　　（する、極彩色娘扇）

動詞連用形を繰り返すことによって反復や同時継続を表す場合にも二拍化例が見える。

本を見い／＼「コレ長吉。……

（見る、臍が茶）

その他、以下のようなものが目についたが、強調の場合に多く見られるようである。

わたしが様なゐゝかゝぬものも有るに

（副詞「得（～ぬ）」、郭中奇譚（異本））

よひかげんに成るてエ

（終助詞テ、郭中奇譚（異本））

来たぜへ　　（終助詞ゼ、南遊記）

4-2 その他の「添加」

《R》

きんぎやう（金魚、意気客初心）

なんにより（男女、意気客初心）

せいぼう（歳暮、意気客初心）

面白(おもしろふ)かつた（面白かった、粋の源）

しやうゆう（醤油、軽口筆彦咄）

あじいになる（味、言葉の玉）

《N》

驚(おどんろ)かす（旧変段）

いんま（今、浪花今八卦）

見んごと（見事、客野穴）

せはしいのんで（助詞ノ、大寄噺の尻馬）

ゆつくりし升のんを（春興噺万歳）

世話を焼(やく)のんも（客野穴）

《Q》

ねツから（根から、陽台遺編）

いつかうなるはいな

（いかい（ウ音便）、風流裸人形）

さつても（扨も、粋学問）

いつち（一、粋学問）

ばつかり（ばかり、粋学問）

深(ふつか)い（南遊記）

ぢつき（直、老楼志）

よつぽと（余程、客野穴）

どつこにも（どこ、水の行すえ）

ぜつぴ（是非、箱まくら）

5.「融合」

後期上方語で「融合」がよく見られるのは、いわゆる助詞融合の場合と、助動詞ヤルが下接する場合である。本節ではこれらについて見てゆく。

5-1 助詞融合

助詞ハ、バが続く場合融合することがある。こうした現象は前期から見られ、当期においても盛んに行われる（園田博文（1996a,b））。珍しいもの以外は用例を略す。

《-i＋wa》

わたしは、わしは、こちは、そちは

→ワタシャ、ワシャ、コチャ、ソチャ

という具合である。上方語の場合、江戸語のように「わたしやア」「わしやア」などの長音化はしない。また、「わたい（私）は」を「わたや」とすることがある。

わたや。夫が大事　（北川蜆殻）

ワタヤふいて置た　（客野穴）

また、『興斗月』には「ありは」を「ありや」とせずに「あらしまへん」とする例が見える。現在ではよく用いられる直音形であるが後期には殆ど見られない。また、母音音節にハが下接する場合、例えば「おもや」（おもひは）といった具合になる。

《-u＋wa,ba》

こいつは、そいつは、あいつは

→「こいつア」、「そいつア」、「あいつア」

これらはツァを表わすものと思われる。またズバ（ズハ）の場合ザとなる。

しれざ言てきかそ　（知れずば、うかれ草紙）

受ざなるまい　（受けずば、嘘之川）

さうせざなるまい　（せずば、箱まくら）

ふんでやらさ成まい。

（やらずば、風俗三石士）

これに類する例としてクバ（クハ）をカとするものがある。

いひたかいふたがよひ

（いひたくば、郭中奇譚（異本））

ねふたか内でねいなア

（ねむたくば、風流裸人形）

安か買ふ　（安くば、軽口五色帋）

『一文塊』には「銭がなきや。銀やれ／＼」という拗音化例があるものの、他に例を見ない。また「いっぱ」という形もあるが通常用いられない。

今宵の趣向といつぱ。是まで官で遊ぶゆへ真の色事が出来ぬ　（言ふは、粋の源）

《-e＋wa,ba》

これは、それは、あれは、おれは、われは、では→コリャ、ソリャ、アリャ、オリャ、ワリャ、ジャ

あれば、おれば、なれば、ねば、たれば、なければ→アリャ、オリャ、ナリャ、ニャ、タリャ、ナケニャ

次の例のように拗音化しない例はこの時期にはわずかである。

そらそと　（それはさうと、郭中奇譚（異本））

こらまあ　（これはまあ、郭中奇譚（異本））

ソラ大談論がりじやナア　（なにはの芦）

コラヤイ　（なにはの芦）

また、ハやバが母音音節に下接する場合、「おもや」（思へば）のようになる。

《-o＋wa》

上接語の尾母音がoの場合にも「融合」例はあるが、「もの」と「こと」の場合に見られるのみである。

わたしらがよふなもナしらぬハイナ

（ものは、うかれ草紙）

それ程のこたしらひでカイ

（ことは、うかれ草紙）

特に「こと」については、「こた」（ことは）以外にも様々な変化を起こす。助動詞ジャや助詞デハが変化したジャが下接した場合は「こつちや」となる。

なんのこつちや　（ことじゃ、月花余情）

にくいこつちやな　（ことじゃ、風流裸人形）

そんなこつちやない

（ことでは、郭中奇譚（異本））

『かたこと』にも

こんなこつちやなどいふこと葉を。よく／＼つゝしみ嗜みていふべからずと云り。京の者の口になれて。むまれ付たること葉のやうにて。なをりがたし。

とあり、前期から既に使われていたものである[18]。また、デが下接した場合、「こって」となる場合がある。

そんなこつてもあろ　（北華通情）

ゑて吉がこつて御座りましやう　（北川蜆殻）

こんなこつて死で堪る物か　（幼稚子敵討）

5-2 ヤルが下接する場合

文化（1804-18）ごろまで用いられた尊敬の助動詞にヤル（連用形接続）がある（村上謙（2002a））。このヤルは、接続時の音環境により様々な音変化を生じたことが知られている。まず、ヤルのような直音ではなく、上接動詞の連用形語末音と融合し拗音ーャルとなった（ex. 行き＋やる→行きゃる）。これは、エ段音（母音音節以外）にヤルが下接した場合の表記から推定される。また、命令形ーャレからレが「脱落」しーャとなる場合がある。

わけ たちやれ　　（立てる、立春噺大集）
わすりやんなや　　（忘れる、風流裸人形）
ちや／＼あぎや　　（あげる、風流裸人形）

これらは、タチャレ、ワスリャンナ、アギャと発音されたことを示すものである。また母音音節 i、e に下接する場合、それが「脱落」する。

《i》

くわせたらくやろ(食ひやろ、原柳巷花語)
来いといや（言ひやれ、郭中奇譚(異本)）
せりあやる（あひやる、鳩灌雑話）
きらやる（嫌ひやる、鳩灌雑話）

《e》

ほたやるさかいじや（ほたへやる、新月花余情）
膳をすやれ（すえやる、色八卦）

後期では「脱落」するものが殆どで、次の例のような非「脱落」形はごく僅かである。

つぎのぶと名をかへや（替へる、軽口福徳利）

この他、『北華通情』には「ともしたりや」「まつたりや」という形で弱い命令を表わす例が見える。これらは～テヤリャレ（テ＋ヤル＋ヤル）からの変化と考えられる。

5-3 ジャッタ、チャッタ、チッタ

助動詞ジャにアッタが続くとジャアッタとなるがこれをジャッタとすることがある。

振袖のじぶんからくびじやつた（うかれ草紙）

京都方言を写した『興斗月』（1836）には、さらにこれが変化したものとして、

おまへとだれといちやつた
（貴方と誰が行ったのか、の意）
大坂ゑなんでだまっていちやつた
（何故大坂へ黙って行ったのか、の意）

のような形が見える。本来ならばイテ（行って）ジャ（ア）ッタとなるべきところである。イテジャッタ→イテチャッタ→イチャッタとなった可能性、或いはイテヤアッタ（→イテヤッタ）→イチャッタとなった可能性が考えられる。「行く」以外でも、

梅尾はんあいにやつちやつたか
（梅尾さんに逢いにやったか、の意）
来ちやつたら川にしておき　（来たら、の意）

とある。このチャッタという語形については現在も報告されている。例えば『兵庫県の方言』（1989）（第 1 章、鎌田良二執筆部分）には、

テヤッタからチャッタの形になったものが播磨の北部、多可郡にある。
シテヤッタ（しなさった）、シトッチャッタ（していらっしゃった）

という報告がある。更に『興斗月』には、チッタという語形も見える。

おまへこないだ大坂ゑいちつたげなゝ
（行ったそうだな、の意）

これはチャッタが変化したものと考えられる。またテジャ（テヤ）がチャとなることもあったようである。次の例はホットイテジャ→ホットイチャとなったものであろう。

あいらなんぼしんまいじやてゝなぜほつといちや
（あいつらは幾ら新米だからといって何故ほったらかしにするのか、の意）

こうした語形は現時点では『興斗月』に 10 例程見えるのみで、よくわかっていない。今後の調査と用例の増補に期待したい。

6. 最後に

本稿では後期上方語における音変化について分類、記述した。挙例に際しては後期に特徴的

なものを挙げるよう心掛けたが、例によって繁簡よろしきを得ず、個別的なものについては前期から見えるものも混じった。これについて付会すれば、後期の音変化が前期のそれを質的に継承していたため、とも言い得ようか。また、用例収集に際して得られた印象を述べれば、こうした変化形が容易に見出せる点、前期とは明らかに異なる。これを、前期において萌芽した諸変化が高頻度化して量的に充実してきたものとして捉えるなら、ここに挙げた諸例はとりもなおさず後期上方語が前期上方語から独自の方向に向かって進んでゆく、その一過程を表すものと言えるだろう。

注

1）享和（1801-04）以降の京都では動詞に直接オを冠した「オ動詞」が登場する（村上謙（2006））。

此あいだもおとまるし（泊まる、箱まくら）、はやうおかゑるがよい（帰る、箱まくら）、今度の芝居お見たか。（見る、花街風流解）、もうちよぼらんおゝぼえたな（覚える、箱まくら）

2）前期の逆行同化とも考えられる例に『好色伝受』（1693）の「かまうともらひますまい」がある。但し後続音節が母音音節ではなく、他に例を見ないから誤刻の可能性が高い。

3）「～てとおくなはる」からオが脱落した「～てとくなはる」が昭和前期に用いられる（「親方、見てとくなはれや」（豆屋（笑福亭松鶴）（『大阪弁』第１集（1948）所収））。

4）In the case of verbs ending in *au*,such as *kau*,”to buy;”*morau*,”to receive;”s*hitagau*,”to follow;”it is indeed optional to pronounce the letters *au* like a long o.But this is more characteristic of Western Japanese than of Tokyo dialect.（p.14,15）

5）-i→-e の交替については『音韻調査報告書』(1905) 第 10 条に調査があり、京都府からいくつか報告される。市内ではネンジン、ケツネ、オホカメを挙げ、「小児婦人若クハ下級ノ社会ニ多少使用セラレザルニアラザレドモ近時益減少ノ傾キアリ」とする。

6）『音韻調査報告書』第 11 条には-i と-u の交替について報告がある。京都府船井郡ではユルリ（囲炉裏）ツマキ（粽）イビ（指）イゴク（動く）チベタイ（冷たい）を挙げる。

7）『音韻調査報告書』第 11 条、京都府船井郡で「大坂イ行ク」が挙がる。

8）「あそこ」には「脱落」を経た「あこ」（箱まくら）もある。

9）『音韻調査報告書』第 13 条には-ae→-ai に関する報告があり、「前」をマイとするところが多い。

10）『謳曲英華抄』（1771、京都大学蔵）には「ゑけせてねへめ江れ　ゑより移るい文字　舌の末あからされば ゑに成也。喩へは冷人弁慶（レエジンヘンケエ）」（本文は縦書、ルビは漢字右、左に「レイジンヘンケイ」あり）とあり、エイがエーと発音されたことがうかがえる。

11）『浪花聞書』に「そうけいくるけいなといふ　江戸のそうかゑくるかゑなり」とある。

12）ゴワリマスの可能性もある。

13）『浪華色八卦』には「さまといふをスととなへるは子（シ）の字ニテ敬ふ詞也」とあって「主」からの変化でない可能性もある。

14）これらは「ぢゃ」の濁点無表記とも考えられるが、この時期助動詞ジャを表す場合は「じ（し）や」と表記するものがほとんどであるからチャであった可能性が高い(5-3)。辻加代子(2007)、増井典夫(2006)など参照。

15）或いは「なんす」のｎ脱落とも考えられる。

16）ちなみに『口語法調査報告書』(1905) 第 15 条には京都や大阪の周辺地域で「さす」以外にも幾つかの語でイ音便形が報告されている。

17）「あれら」「これら」からの変化の可能性もある。

18）「こちら」の意味で用いられる「こつちや」もある（こつちやのがよひ（郭中奇譚（異本））。

（付記）

本稿は科研費補助金（「明治大正期関西弁の史的研究」（若手研究（B）平成 20-23 年度））による研究成果の一部である。

なお、本稿は執筆者自身による組版を余儀なくされたものであり、行間のズレなどを残さざるを得なかったことを断わっておく。言うまでもなくこれは経費節減のためであるが、本学部においては次年度以降、紙媒体での紀要の発行は停止される予定である。

引用文献

園田博文（1996a）「後期上方語における助詞融合をめぐって ―「デ」と係助詞「は」との連接を中心に―」（国語学研究 35）
園田博文（1996b）「後期上方語の助詞融合 ―一人称代名詞と係助詞「は」との連接をめぐって―」（日本語学科論集 6）
辻加代子（2007）「近世京都語資料に現れた待遇表現形式チャッタに関する覚書」（日本語の研究 228）
増井典夫（2006）「近世後期上方語における“ちゃった”について」（国語学研究 45）
村上謙（2002a）「近世後期上方における「動詞連用形＋や」について―連用形命令法と助動詞ヤルとの関連―」（国語国文 71・6）
村上謙（2002b）「近世後期以降の上方における形容詞ウ音便の変化形について」（国語と国文学 79・3）
村上謙（2003a）「近世後期上方における連用形禁止法の出現について」（国語と国文学 80・12）
村上謙（2003b）「近世後期上方における形容詞ウ音便の短呼形について」（国語国文 72・7）
村上謙（2003c）「近世後期上方における連用形命令法の出現について」（国語学 213）
村上謙（2004）「近世上方語資料としての歌舞伎，浄瑠璃」（日本語学 284）
村上謙（2006）「近世後期上方における一段化動詞について」（国語と国文学 83・2）
森田武（1977）「音韻の変遷（3）」（『岩波講座日本語 5　音韻』）

（2010年 9 月30日提出）
（2010年10月15日受理）